

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00868

研究課題名（和文）課題解決型言語活動による主体的・対話的で深い学びの実証的研究

研究課題名（英文）Practical Research on Implementing Proactive, Interactive, and Deep Learning through Project-based Language Teaching

研究代表者

東野 裕子（HIGASHINO, YUKO）

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授

研究者番号：20781686

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小学校高学年の外国語科において検定教科書を活用し、児童の興味・関心、発達段階に応じた英語絵本・段階別絵本を教材としたプロジェクト型（課題解決型）の単元を開発・授業実施し、「主体的・対話的で深い学び」の具体化を図るものであった。開発したプロジェクト型の単元を実践と質問紙や振り返りによる評価を通して、児童の英語学習への意欲を高め、言葉として英語を伝え合うことへの自信の伸長が実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、2020年に日本の小学校で初めて教科となった外国語において、学習指導要領の謳う「主体的・対話的で深い学び」を実現するための課題解決型（プロジェクト型）の単元を開発したこと、また、その単元に、初めて出版された検定教科書を使用し、かつ、児童の興味・関心のある題材として英語絵本を教材として活用したことは、学術的に価値のあることである。

開発・実証された単元の学習指導案や教材等は、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』の趣旨に沿っており、学会や研修会を通して広く公表したことは現職の教員のみならず、教員を目指す学生や社会人などにも参考となり、社会的に意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine how the Course of Studies proposes to implement and nurture "proactive, interactive and deep learning" through project-based language teaching (PBLT) in public elementary schools. The methodologies include accumulative, proactive, and problem-solving activities, using graded pictures books as teaching materials. Both teachers and students have helped focus these approaches, through questionnaires and reflections. As a result, both have more actively participated and have been able to use English as a means of communication with more confidence.

研究分野：英語教育学

キーワード：主体的・対話的で深い学び 英語絵本 段階別絵本 プロジェクト 検定教科書 TBLT

1. 研究開始当初の背景

本研究は、学習指導要領の求める「課題解決型の授業による主体的・対話的で深い学びの実現」には、検定教科書の内容や練習と関連し補足する、授業単元と教材の開発が必須であるとの実践研究(東野・高島, 2007; 2011 など)を基盤とし、その具現化の必要性が発端となっている。

第二言語習得(Second Language Acquisition, SLA)理論研究(例えば, VanPatten, 1996; Long, 1983; Swain, 2005)を背景に、検定教科書の練習や言語活動に加え、インプットの量と質を補強するものとして英語絵本や GRs (graded readers) を基本的な素材として導入し、児童自らが考え、与えられた課題を解決していく際に、児童同士や教員とインタラクションしながら学級担任や ALT (Assistant Language Teacher) の指導の下で言語活動を実践し、発表などによるアウトプットを行う際に、教員や児童同士の修正などのフィードバックを受ける流れを授業の基本的な枠組みとした。このことにより、アウトプットが再び(修正された)インプットとなることで、一連の関連した活動サイクルが授業単元の核となることで、言語習得が促進されるからである。本研究の狙いは、この「と」の段階で、児童が「思考し、主体的に活動に取り組み、対話を通して、深い学びに繋がる」ことを検証することとした。また、他の児童や教員との対話により、互いの学び方を工夫する学習方略が他教科への転移することや強化が相互に関連して学習を促進する相乗効果も視野に入れている。

上述の実証研究を試みる背景には、学習指導要領(平成 29 年告示)が、各教科等で「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習活動を求めることに派生する。『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』では、学習者が言語使用の必然性を感じ、練習に留まらず、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を行うこと」(文部科学省, 2017: 23)を必須としている。これらの目的は、教師や教科書、教材等から得た知識を基に、学習者が自主的に学ぼうとする姿勢を持ち続け、ペアやグループ活動による様々なコミュニケーションを通して考え、知識を広め、深め、互いを高め合うことをねらいとしていると考える。外国語(英語)科では、繰り返しに留まらない練習に加え、教室内の「言語活動」が教室外のコミュニケーションへと繋がること不可欠となるからである(高島, 2011)。

現実に目を向けると、日本に限らないが、世界の英語教育には、文法などの英語に関する何らかの知識は持っているが、コミュニケーションの手段として使うことができない inert knowledge problem (「不活性な知識の問題」, Larsen-Freeman, 2003)がある。日本では 2020 年度から「大学入学共通テスト」のリスニングとリーディングを同等の得点(100 点)とする改革は、平成元年の学習指導要領改訂から求めてきた、自己表現が可能なコミュニケーション能力育成が十分となっていない現実への授業改善を求める策の基礎固めの一環である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、全教科に共通の「主体的・対話的で深い学び」の実現を、小学校外国語教育の観点から、学習指導要領が求める「言語活動」を通して可視化することである。

3. 研究の方法

英語絵本や GRs の第 5・6 学年用にリライトによる教材化(modified materials)・「小学校英語教材基準表」の作成

そのリライト教材を活用した授業計画と言語活動の開発

言語活動の実施と調査(主に、聞くことと話すこと)・質問紙調査(学習方略、英語学習に対する意識・意欲)

学習状況や学習意欲を量的、質的に統計処理することにより可視化し、「主体的・対話的で深い学び」が実現する授業内容や言語活動の有効性の検証

4. 研究成果

(1) 初年度の成果

2020 年度は、本研究のバックボーンとなる、Ellis (2020) の小学校英語教育に関する論文を基本文献とし、科研協力校の教員にも共有できるように日本語に翻訳している。

英語絵本などの教材化に先立ち、当該年度から外国語科の授業で使用されている第 5・6 学年の外国語科の検定教科書の分析を行った。検定教科書 7 社について、目次(単元名など)、各単元の言語材料、練習、言語活動について調査した結果、単元名については、当該単元で使用する主な英語表現と共に最終的なゴールや言語活動(例えば、「自己紹介をしよう」)がわかるものや、扱う題材(例えば、「教科、習い事」)が示されているものが見られた。言語材料は、学習指導要領や文部科学省から配布された教材 *We Can!* の内容を踏襲し、同じものを扱っている。また、各社の単元における学習活動は、練習や言語活動があるが、単元内の進行が、極端に難しくなったり、それまでの英語経験では容易に活動できなかったりするなど、活動の連続性などに課題が見られた。また、単元最終の言語活動が、課題解決型活動としては、弱いバージョンとなっている出版社や単元も多くあり、児童の発達段階や興味に合った題材や活動とする改善の余地が見受けられた。

次に、本研究で使う英語絵本や段階的絵本を国内外書店などから取り寄せ、内容を吟味した。検定教科書の各単元の言語材料に合った英語絵本や段階別絵本を「英語絵本基準表(東野 2020)」などを参考に選択し、単元の中の練習や最終の言語活動に活用できるように、一部、リライトをした。絵本を活用した練習や言語活動が決定した単元においては、単元の流れ(授業の流れ)な

どを考え、教材の準備や、授業アンケートや振り返りシートの作成など実証授業に備えた。

(2) 2年目の成果

2021年度は、2020年度の研究成果を踏まえて次の6点を行なった。

リライト教材を活用した言語活動の構想；検定教科書 New Horizon Elementary English Course 5 (東京書籍) の Unit 4 の言語材料 (He can bake bread well.) と関連のある、英語絵本 *Flat Zoo* (Owl & Dog Playbooks) をリライトして教材化し、言語活動「動物の特徴を生かした絵本をつくらう」を設定した。

授業準備；単元計画を(1) 絵本を聞こう (1時間)、(2) 表現を練習しよう (2時間)、(3) オリジナルの絵本を作ろう (2時間)、(4) オリジナルの英語絵本を発表しよう (2時間) とし、検定教科書の練習を十分に活用し、他人などに使いにくい否定表現である“~ can not ~.” を、英語絵本 *Flat Zoo* に登場する動物の特徴で学習できるように計画した。指導案作成、教材を準備し、研究協力校の授業実施教員と打ち合わせをした。

質問紙の作成；授業参加への意欲、五つの領域に対する自信、今後の領域に対する取り組みへの意欲などについて 10 項目の調査紙を作成した。

言語活動を中心とした授業実施；第5学年、2学級、59名の児童に実施した。

意欲調査の実施；で作成した質問紙を使用して、全8時間のうち、小単元終了後に振り返りとして児童の意欲や4技能に関わる自信を調査した。

データ収集・分析；の調査の10項目に関して、4件法で回答させたものをそれぞれ4、3、2、1の数値に変換して平均値を算出した。

(3) 3年目の成果

2023年度は、前年度の成果を踏まえ、次の3点を行った。

データ分析；収集した質問紙及び振り返りのデータについて、2年目は集団としての分析を行い(4件法で回答を点数化し平均値を算出)全体像を把握した。3年目は、加えて、8時間の授業を経時的に学習状況を追跡し、個々の項目の分布状況の分析を行った。さらに、児童の8時間の振り返りから、児童の学習意欲の変化を4つの型(高 高へ変化、高 低へ変化、低 高へ変化、低 低へ変化)に分類し、授業内容との関連を探った。また、振り返りにおける児童の自由記述を KH コーダで分析し、頻出語句をキーワードとして取り出し児童の授業に対する心的態度の特徴を探った。分析には、2年目は SPSS Ver.28 を、3年目は JASP 0.17.10 を使用した。

新規に購入した絵本の分析と単元の構築；1年目に行った教科書分析と絵本(英語絵本、段階別絵本)分析を踏まえ、新規購入絵本(例えば、Shortest Bedtime Story Ever, Suddenly)の分析を行い、授業に活用できる新単元を構想した。加えて、並行読書や発展読書ができるように言語材料の難易度やテーマなどに関して整理した。

1年目の英語絵本及び検定教科書の分析結果と単元構想について、及び2年目の授業実施に伴う調査の分析結果を全国英語教育学会北海道研究大会(オンライン開催)で発表した。

(4) 4年目の成果

2023年度は前年度に行なった、

データ分析、児童の8時間の振り返りから、児童の学習意欲の変化を4つの型に分類し授業内容との関連を調査、新規購入の絵本分析と単元の構築を踏まえて、最終年度として次の2点に取り組んだ。

並行読書の単元の開発；3年目に購入した英語絵本の中から児童が興味を持ち、理科、社会科学学習と関連付けられる恐竜をテーマとするものを選び、小学校5・6学年用の単元を開発した。具体的には、「恐竜オーデションをしよう」とし、恐竜の形状や棲んでいる時代、場所などを調べ、最終的な言語活動として発表するものである。恐竜の形状を表すのには既習の語彙を中心に使い、時代や場所については、理科「地層の重なりと過去の様子」や社会科「地理的環境」や「歴史」などとも関連付けて学習できるように構成とした。

研修会を通して発表；「主体的・対話的で深い学び」が実現するための、児童が意欲を持ち、英語力の伸長が期待できる単元、言語活動の在り方や内容を複数の研修会を通して発表し、国内外の教員に周知した。具体的には、私立学校・公立学校の英語科授業研究会、海外でのセミナーにおいてワークショップ形式で開発した検定教科書の言語材料を使い英語絵本を活用した単元について紹介等を行なう実践研究・報告等を通して、3つの学びが実現するための小学校英語教育における言語活動の内容を精査した。

以上の研究成果をまとめ協力校や希望する学校・センター等に配布した。

引用文献

Larsen-Freeman, D. *Teaching language: From grammar to grammaring*. Boston, MA: Thomas and Heinle, 2003, 170p.

Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4(2), 126-141.

Swan, M. (2005). Legislating by hypothesis: the case of task-based instruction. *Applied Linguistics*, 26(3), 376-401.

高島英幸(編著)(2011).『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店。

東野裕子・高島英幸(2007).『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』店。

東野裕子・高島英幸(2011).『プロジェクト型外国語活動の展開 児童が主体となる課題解決型授業と評価』高陵社書店。

文部科学省(2017).『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』。

文部科学省(2018).『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 高島英幸 | 4. 巻 No. 1634 |
| 2. 論文標題 英語教育羅針盤 英語教員に知ってほしいこと | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 週刊教育資料 | 6. 最初と最後の頁 48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 高島英幸 | 4. 巻 No. 1638 |
| 2. 論文標題 英語教育羅針盤 英語教員に知ってほしいこと | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 週刊教育資料 | 6. 最初と最後の頁 48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 東野裕子 | 4. 巻 No. 1645 |
| 2. 論文標題 英語教育羅針盤 英語教員に知ってほしいこと | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 週刊教育資料 | 6. 最初と最後の頁 48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 東野裕子 | 4. 巻 No. 1649 |
| 2. 論文標題 英語教育羅針盤 英語教員に知ってほしいこと | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 週刊教育資料 | 6. 最初と最後の頁 48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 東野裕子 |
| 2. 発表標題 探究する子の育成 - 課題解決型（プロジェクト型）授業の創造 - |
| 3. 学会等名 成城学園初等学校 第41回教育改造研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 東野裕子・高島英幸 |
| 2. 発表標題 検定教科書単元における英語絵本活用による主体的・対話的で深い学びの実現 |
| 3. 学会等名 全国英語教育学会 第47回北海道研究大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 東野裕子 |
| 2. 発表標題 探究する子の育成 - 課題解決型（プロジェクト型）授業の創造 - |
| 3. 学会等名 成城学園初等学校 第40回教育改造研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 東野裕子 |
| 2. 発表標題 国際理解教育 - 英語教育を中心とした交流活動 - |
| 3. 学会等名 成城学園初等学校 国際理解教育研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 東野裕子・高島英幸 |
| 2. 発表標題 検定教科書分析による主体的・対話的で深い学びを実現する言語活動の提案 |
| 3. 学会等名 日本児童英語教育学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 東野裕子 |
| 2. 発表標題 児童の内より起こる活動性が発揮されるカリキュラムを目指して |
| 3. 学会等名 成城学園 初等学校 教育改造研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 高島英幸 編著 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 大修館書店 | 5. 総ページ数 340 |
| 3. 書名 タスク・プロジェクトの英語授業 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|--|--|----|
| 研究 分担者 | 高島 英幸 (TAKASIHIMA Hideyuki) (40128434) | 東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|